

「夕陽妄語^{せきようもうご} 3」 加藤周一



◆◆◆1930年「それでもお前は日本人か」

一億一心、滅私奉公、宮城遥拝、名誉ある孤立、撃ちてし止まん、多くの日本人はそういう規格に合わせて生きていたのである。

しかし例外はあった。白井健三郎、当時海軍軍令部に勤めていた。当時東大法学部学生二人に食ってかかれ「きみ、それでも日本人か」と言い出した。白井は落ち着いて「いや、まず人間だ」と答えたという。一人で二人に対していたのではなく、ただひとり社会の圧倒的多数意見に対抗していたのである。しかも多数意見は官製であった。「まず日本人」説を作り、鼓吹し、教育して、多数意見としたのは、国家権力である。白井の精神の自由を私は尊敬する。モンテスキュー、道元、富永仲基、内村鑑三、いつの時代にも、日本国民の全てが大勢順応主義者であったわけではない。

「それでもお前は日本人か」をくり返しながら、軍国日本は多数の外国人を殺し、多数の日本人を犠牲にし、国中を焼土として、崩壊した。その反省から成立したのが日本国憲法である。その憲法は人権を尊重する。

「それでも日本人か」という代わりに「それでも人間か」といいだすであろうときに、はじめて、憲法は活かされ、人権は尊重され、この国は平和と民主主義への確かな道を見出すだろう。

◆◆◆日本国憲法第9条の要請と日米安保条約の要請との矛盾

米軍が世界のどこかで戦争をすれば、自衛隊はまいこまれる可能性があり、米軍が攻撃されれば自衛隊が応戦しないことは軍事同盟の性質からみてきわめて困難だろう。発砲すれば9条に違反し、しなければ安保条約が成立しない。そこで二つの解決法が考えられる。9条を変えること、安保条約を変えること。安保条約は冷戦の最盛期、朝鮮戦争の最中に作られた。しかし今では相手方のソ連邦はなく、「日本を脅かす」超大国はない。朝鮮戦争も休戦となって久しい。今や日米両国にとって見直されるべきものは9条ではなくて、安保条約であろう。二つの道のどちらを選ぶのか、それを決めるのは、この国の主権をもつ国民である。

◆◆◆三つの寓話

日本国民が国の内外での出来事の要点を知るのは、主として新聞やテレビのような大衆報道機関による。したがって報道機関がどの程度まで外部の圧力（たとえば政府や広告主やジャーナリズム市場）から自由であり、どの程度までその提供する情報が客観的であるかは、日本国の民主主義が機能するかどうかを左右するにちがいない。私が長い間忘れていた寓話をあらためて思い出したのはそのためである。

第一の寓話は、八〇年代の英国。保守党の政治家がBBC（英国の公共放送）の「偏向報道」を糾弾するという意味のものであった。英国では国民生活の関係の深い劇が国民の前で演じられる。

第二の寓話は、七〇年代の米国。副大統領と有力な一新聞との間に、収賄・脱税疑惑をめぐり対立が生じた。しかし力関係はあきらかに平等ではなかった。一方は一新聞社にすぎない。するとある朝、情勢が一変したのである。前日までは副大統領 VS 一新聞社の戦いが、その日からは副大統領 VS 米国の主要な報道機関すべてに変わった。報道の自由を偉大なアメリカの文化的伝統の欠くことのできない一部分と考える国民があった。

第三の寓話は、三〇年代後半の東京。「自己規制」が言論機関に作用していたかは学生の一人であった当時の私には知る由もなかった。しかし報道言論の表面にあらわれた変化、一見おだやかな、なしくずしの変化に、特定の方向のあることだけは、私にも見誤りようがなかった。

言論の自由、そしてあらゆる批判精神は、指の間から漏れる白砂のように、静かに、音もなく、しかし確実に、失われつつあったのである。その結果がどこへ行き着いたかは言うまでもない。

◆◆◆「テロがあって、報復して、またテロがあって、報復をして、・・それから世界はどうなるの？」

小学校三年くらいの少女の言葉。人生の三期。30-50代の年齢層はまさに社会の中心に位置する。彼らは政治的・経済的・文化的なあらゆる分野で、中心的役割を果たし、組織を支え、社会の「大勢」を決定する。幼年では家庭、中年では職場、どちらの場合にも集団の圧力は圧倒的である。子供の場合には、社会化不十分のため、与えられた文化の受容へ向かう（「良い子」の定義）、中年の場合には、社会化の行き過ぎのため、大勢順応主義へ向かう（かつての組織への忠誠、今日の個人の安全保障）。そこから大勢順応主義を破る個人の、市民としての、独立の精神は、容易に成立し難い。もし一身独立しなければ、福沢諭吉が指摘したように、一国独立することもないだろう。比較的集団の圧力が弱い時期は、学生と老年期。学生と老人と女性、もし何かが変わるとすれば、そこから変わり始めるかもしれない。

◆◆◆『江藤文夫の仕事』

第一に文筆業、第二に教育、第三に文化運動、そして第四の領域にも注意しておきたいと思う。それは会話、とくに雑談である。すべての会話は一期一会である。二人の人間が役割を絶えず交換しながら作る空間は、特定の場所で特定の時間におこるすべての出来事のように、一回限りのものだ。人生の全体のように。

『江藤文夫の仕事』全四巻、その内容は驚くべき多面的である。微妙な心の動きを現代人の中に見とどける眼を狭くは日本社会が、広くは世界が必要としていないだろうか。必要としているに違いないと私は思う。それでも江藤文夫は死んだ。

「死」こそこの世でもっとも不合理な現象である。

◆◆◆ドゥ・ゴール大統領のフランス「ゴーズム」

アルジェリアの独立運動を弾圧する戦争は、アルジェのカスバで泥沼化していた。大統領はどうしたか。第一、自力による核抑止力の開発。第二、外国の兵力・司令部・軍事施設をフランス領土内に置かない。第三、圧倒的な現地住民に支持されて植民地解放を要求する活動家を火力の優越と非合法の拷問によって制圧することはできないと速やかに見抜き、エヴィアン協定で独立を承認した。彼は偉大な共和国を望む理想主義者であったろうが、決して夢想家ではなかった。夢想家はドゥ・ゴールではなく、ドゥ・ゴールが夢想家であると空想した側である。状況が急激に変化すれば、ほとんどの情報は十分でない。そういう場合には、直感的で理想主義的な当事者の倫理的な価値観を導きの糸として結論に向かうほかない。それは実証的方法の限界を超えて、その先の結論への想像力の飛躍を可能にするのである。

◆◆◆さかさじいさん (2008.07.26)

その国で栄える「どろぼう主義」。一方には働けど働けど楽ならざる世の中がある。その世の中の秩序を統御するのは、国民から税金をもらって暮らす役人である。その役人の任務は、国民の必要に応じること。急な場合には急な、ゆるやかな場合にはゆるやかな手段を講じることである。国民（主権の保持者）が上にあり、雇われた専門家集団がその下にある。これが民主主義のどの地域でも実現されない。またそれ故にこそ極めて重要な理想である。役人が威張る国は、まさに民主主義をさかさに吊るした原型ではないか。さかさのものをいくらボチボチ手直ししても、正当な位置にはもどない。さかさの体系をもう一度ひねってさかさにするほかないでしょう。

◆◆◆案内まとめ

加藤周一さんは2008年12月に亡くなっていますので、さかさじいさんはその5ヶ月前に書かれています。そんな強い思いを通読できる本です。新建の憲章の最後は「建築とまちづくり、生活と文化、自由のために平和を守ろう」ですので、1~3巻とも、案内させていただきました。

(案内 黒野晶大)

江藤文夫の仕事
4

1983-2004

江藤文夫

...

